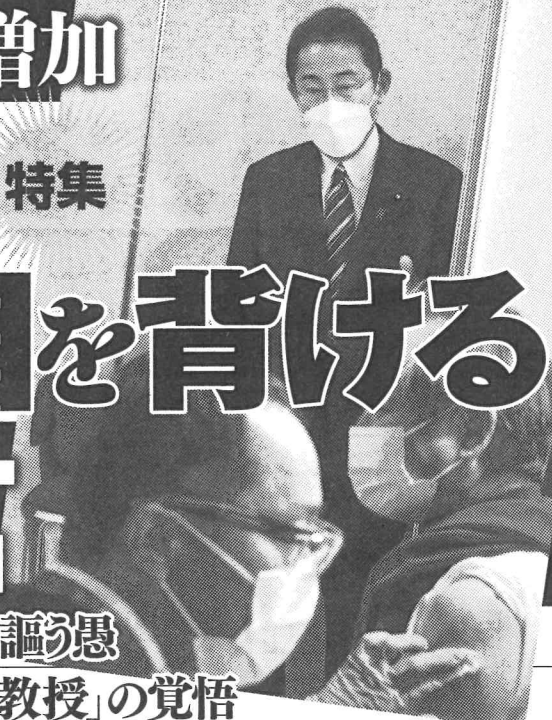


コロナワクチン接種に関する業務全般に携わっている厚労省の職員は皆、「鋼のメンタル」の持ち主なのだ

ろうか。医療機関やワクチン製造販売業者から国に報告された、国内でのワクチン接種後の死亡例は2022年11月13日までに191



1カ月で47件増加

「不都合なデータ」から目を背ける 「河野太郎」の妄言

治験結果で「安全性」を謳う愚
に国を訴える「福島名誉教授」の覚悟

「5類」への引き下げは決めたが……

9件あった。これが先ごろ更新され、「22年12月18日までに1966件」が最新のデータとなった。つまり、約1カ月で47件も死亡事例が増えたのだ。相変わらず厚労省が因果関係を認めないケースはなく、ほとんどが「評価不能」とされているが、死亡事例は着実に積み重なっていき、厚労省には、そのことに良心の呵責を感じ、職員はいないのだろうか。「副反応疑い報告制度で報告された死亡事例のうち、9割以上を「評価不能」としているのは、制度が形骸化していることを示しており、結論が最初から決まっているとしか考えられない。予防原則で考えれば評価不能なものも全てワクチンの影響かもしれないと考えなければならぬのに、その逆になっているのです」と語るのは、「ワクチンの境界―権力と倫理の力学」の著者で神戸大学大学院経営学研究科教授の國部克彦氏である。

「その背景には無謬性、つまり、行政や官僚機構が基本的に間違いを犯すことはないという前提で動いていることがあると思います。また、国民の側もワクチンを打った人のほうが圧倒的に多い。打った人は自分の判断は間違っていないか、と思いたい。そんな人間的な感情と、行政側が維持したい無謬性の原則が合わさる、ワクチン接種推進ありきの方向性を変えられなくなっているのです」

「最近、一部のマスコミがワクチンに関するセンセーショナルな記事を書いています」本誌はこれまで6回にわたってコロナワクチンの「光と影」について取り上げてきた。その内容は決して「センセーショナル」なものではないから、河野氏の念頭にあるのは本誌記事ではないのかもしれないが、ブログの記述はこう続く。「記事の内容は、相変わらず、ワクチンを接種した後、何人が死んでいるといったワクチンの危険性を煽るような記事で、科学的とは言えず、HPVワクチンの二の舞にならないかと危惧しています」

自らを「コロナワクチンの運び屋」と称する河野太郎デジタル大臣は、現在1966件に達した「ワクチン接種後死亡事例」にまともに取り合うつもりはないらしい。何しろ、彼にとつて遺族の話は、「誰々がどうしたというエピソード」でしかないようだから――。

「接種後死亡」1

「不都合なデータ」 「河野太郎」

「河野大臣」がファイザー「初期」
「データ不開示を取り消せ」

ブログに「妄言」を綴った河野氏



「14新型コロナウイルスワクチン・コロナウイルス」
「16デジタル大臣」
河野太郎ブログより
2023.01.29
最近、一部のマスコミがワクチンに関するセンセーショナルな記事を書いています。しかし、記事の内容は、相変わらず、ワクチンを接種した後何人が死んでいるといったワクチンの危険性を煽るような記事で、科学的とは言えず、HPVワクチンの二の舞にならないかと危惧しています。
2020年7月から11月の間にワクチンを接種した15,185人のうち、重篤な有害事象も100人以上に出た。631人がプラセボ（偽薬）を接種したのに対し、1%未満の4人が死亡しています。
ファイザーのワクチン接種後死亡との因果関係はないとされています。重篤な有害事象も100人以上に出た。631人がプラセボ（偽薬）を接種したのに対し、1%未満の4人が死亡しています。
ファイザーのワクチン接種後死亡との因果関係はないとされています。重篤な有害事象も100人以上に出た。631人がプラセボ（偽薬）を接種したのに対し、1%未満の4人が死亡しています。

資料やデータ、医学論文などを元にしており、非科学的と批判されるような部分は全くない。やはり河野氏が言う「一部のマスコミ」とは本誌のことではないと思われるが、ブログでは次のようなデータを示した上で、ワクチン接種と死亡事例などとの間に因果関係はない、と主張している。「ファイザーのワクチンの治験では、2020年7月から11月の間に21,621人がワクチンを接種し、重篤な有害事象が出たのはそのうち0.6%にあたる126人、死亡したのは0.1%未満の2人です。これだけみると、ワクチンで死亡者が出た、重篤な有害事象も100人以上出ていると、反ワクチン派が騒ぎそうですが、治験では、同じように21,631人がプラセボ（偽薬）を接種し、0.5%にあたる111人に重篤な有害事象が出て、やはり0.1%未満の4人が死亡しています。」

長年小児がんの研究、治療に携わってきた名古屋大学名誉教授の小島勢二氏によると、河野大臣がブログで取り上げたのは、2020年に「NEJM」（ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン）に公開されたファイザー社製ワクチンの治験結果だという。「ワクチンの接種が始まったからの約2年間、全世界では、今年1月末現在で132億回以上のワクチンが接種され、死亡事例を含め膨大なリアルワールドデータが集積されています」と、小島氏。

「また、1年前の時点ですでに1000報以上のワクチンのリスクに関する医学論文が報告されています。とりわけ最近追加接種の度数は出ているわけ、ワクチン接種と有害事象や死亡との因果関係はないと言えます」

ゾツとする「本性」

自国のデータに触れず、海外のデータに基づいてワクチンの安全性を主張することに違和感を覚えます」(同) ブログで「ワクチンが原因で死亡が増えている」ということはない」と断定しているのに、ワクチン接種後死亡例が1966件も報告されていることに触れていないのは、確かに妙である。死亡例の実に99・5%は、情報不足等によりワクチン接種と死亡の因果関係を「評価不能」と判定されただけで、因果関係が否定されているわけではない。

「その不都合な事実」から目を背けているのだろうか。「報告を行った担当医や病理解剖を行った病理医が、ワクチン接種との因果関係を認めているケースもあるのに、それを『評価不能』とする根拠はどこにあるのでしょうか。誰が判定しているのか。判定基準はどういったものなのか。そこを明かさなければ評価制度に対する国民の不信が広がるのは当然です」(同)

氷山の一角

本誌が遺族の話をお伝えしてきたのは、それが「死亡事例1」「死亡事例2」といった無味乾燥な報告データではないことを示すためである。死亡事例が1966件あれば、そこには1966通りもの血の通った人生がある。

約1カ月後の8月16日、2回目のワクチン接種をするつもりでしたが、亡くなった後に弟の会社に健康診断の数値などを見せてもらいましたが、全く異常はありませんでした

「その翌日は仕事に行って、同僚の方とも普通に話していたそうです。ところが次の日の朝、来るはずの時間に弟が来ない。同僚の方が携帯に電話しても繋がらない。それで会社の方が弟の自宅に行ってインターフォンを押しても反応がないのでアパートの管理人さんに鍵を開けてもらって中に入ったら、パジャマ姿の弟が顔面から床に突っ伏すように倒れていたそうです」

クを受けています。普段は絶対に失敗しないスライディングで失敗して骨折したほどです」

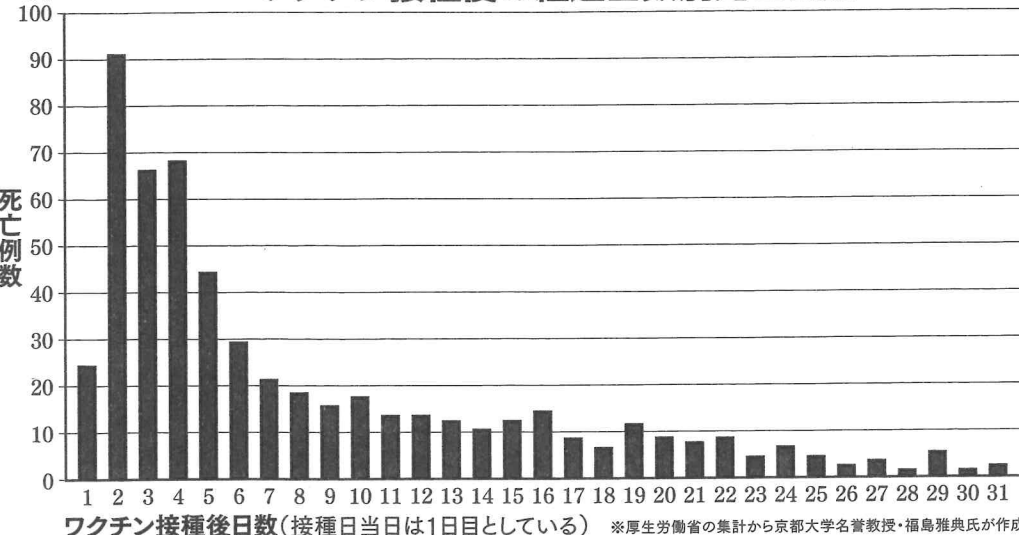
「SNSには、親族や身近な知人がワクチン接種後に亡くなったという報告が溢れています。我が国では、ワクチン接種後に死亡した

現在の接種後死亡例1966件は氷山の一角かもしれないのだ。京都大学附属病院外来化

「2月2日に記者会見をする予定ですが、厚労省にワクチン接種者と未接種者の重症化率や致死率について

「ファイザー社が米食品医薬品局(FDA)に提出した資料は、アメリカの非営利団体が起こした訴訟で裁判による判決が出て公開されました。そこには1200を超えるワクチン接種後の有害事象リストが記されていますが、訴訟がなければ私たちはそんな重大なことを知ることができなかった。今回、ワクチンのそうしたデメリットが周知されないまま、全国規模で接種が推進されてきたのです」

ワクチン接種後の経過日数別死亡者数



死亡例数 (人) ワクチン接種後日数(接種日当日は1日目としている) ※厚生労働省の集計から京都大学名誉教授・福島雅典氏が作成

「今は『週刊新潮』などがようやくワクチンのリスク情報も取り上げるようになってきた。報告されているのは、接種後2日、3日、4日、5日、6日、7日、8日、9日、10日、11日、12日、13日、14日、15日、16日、17日、18日、19日、20日、21日、22日、23日、24日、25日、26日、27日、28日、29日、30日、31日

「2月2日に記者会見をする予定ですが、厚労省にワクチン接種者と未接種者の重症化率や致死率について正確なデータの公開を求めます」(同)

「訴訟は、あるはずのデータを求められて、開示しません」と答えた国に対する一つのケジメです。このようなデータはコロナ対策に必須でしょう」(同)

昭和31年2月20日第三種郵便物認可 令和5年2月9日発行(木曜日発行)(2月2日発売)第68巻第5号

週刊新潮

2月9日号
440円

読者アンケート
実施中!



5